

I 研究主題

教職員が共に学び合いながら充実感を味わえる授業づくりの在り方
～メンタリングの手法を取り入れた活動を通して～

II 主題設定の理由

本県では平成25年3月に、教職員として自ら向上しようとする姿勢を支援するための指針として「教職員の資質向上実行プラン」が策定された。これは、子どもたちにとって、学校における最大の教育環境は「教職員」であり、その教職員が子どもたちから信頼を寄せられる存在であり続けるためには、人として尊敬され、温かい人間性や優れた指導力、創造的企画力、絶えず学び続けようとする強い姿勢等が求められるという考えに基づき作成されたものである。

このプランの中で、本県教職員の現状と課題として、40歳代及び50歳代の教職員が約7割を占めているため、今後小学校を中心に管理職を含めた経験豊かな教職員の大量退職と、それに伴う若手教職員の採用の増加が予想されることや、年齢構成の偏在化に加え、児童生徒数の減少に伴う学校の小規模化によって、教職員が校内で互いに学び合い、刺激し合いながら成長していくといった同僚性が発揮しづらい環境になってきていることが挙げられている。そして、このような現状をふまえ、各学校において、ベテラン教職員の経験や知識、技術を若手教職員や中堅教職員へ継承していくために、専門性を高めるOJTを意図的に推進する必要があることが示されている。

本校の職員構成は、県の傾向と同じく40歳代以上の教員が7割以上を占めている。学校で行われる諸会議等、その知識・経験・技術が他の職員に継承されていると感じられる場面が数多く存在し、ベテラン教職員の知識・経験・技術に支えられている学校であるといえる。しかし、お互いの日常の授業実践については、じっくりと話す機会は少なく、教材分析、指導法等については、各個人の考えに委ねられていることがほとんどである。

そこで、教職員の資質向上実行プランに例示されている「メンターチーム」という組織を活用しながら研究を深めていくこととする。「メンターチーム」とは、複数の先輩教職員が複数の若手教職員等をメンタリングすることで相互の人材育成を図るというOJTのシステムの1つであり、メンタリングとは、指示や命令によらず、対話による気付きと助言等によって、相談者の自発的・自立的な発達を促す人材育成法である。自発的・自立的な発達を促すことは、絶えず学び続け、自らの資質・能力を高める姿勢をもつ教職員を育成することであり、プランに示されている「求められる教職員像」を確立することでもある。

研究を進めるにあたっては、学年部をメンターチームとして、主題研究の授業づくりにおいてメンタリングを取り入れる。校内の研究目標の具現化に迫っていく過程における授業研究会を軸として本研究を進めることで、授業者と関わり合おうとする意識を高め、お互いの知識・経験・技術の継承を促進させていく。その際、お互いに高め合える人間関係を構築するためには、自己開示をすることが大切であることを伝えるとともに自己有用感や自己存在感を味わわせるようにする。また、年齢構成が偏在化しているという本校の職員構成が「同僚性が発揮しづらい環境」というものではなく、「ベテラン教職員の知識・経験・技術が継承されやすい環境」「教職員の学び合いを進める上で最適な環境」という認識になるように研究を進めていく。これらのことにより、「知識・経験・技術」と「人間関係」が繋がっていくことや広がっていくことが促進され、それは、必ず子どもの成長に結び付くものであると考える。

上記で示した内容を行うことで、教職員の資質向上が図られ、お互いに充実感を味わえる授業づくりができると考え、本主題を設定した。

Ⅲ 研究目標

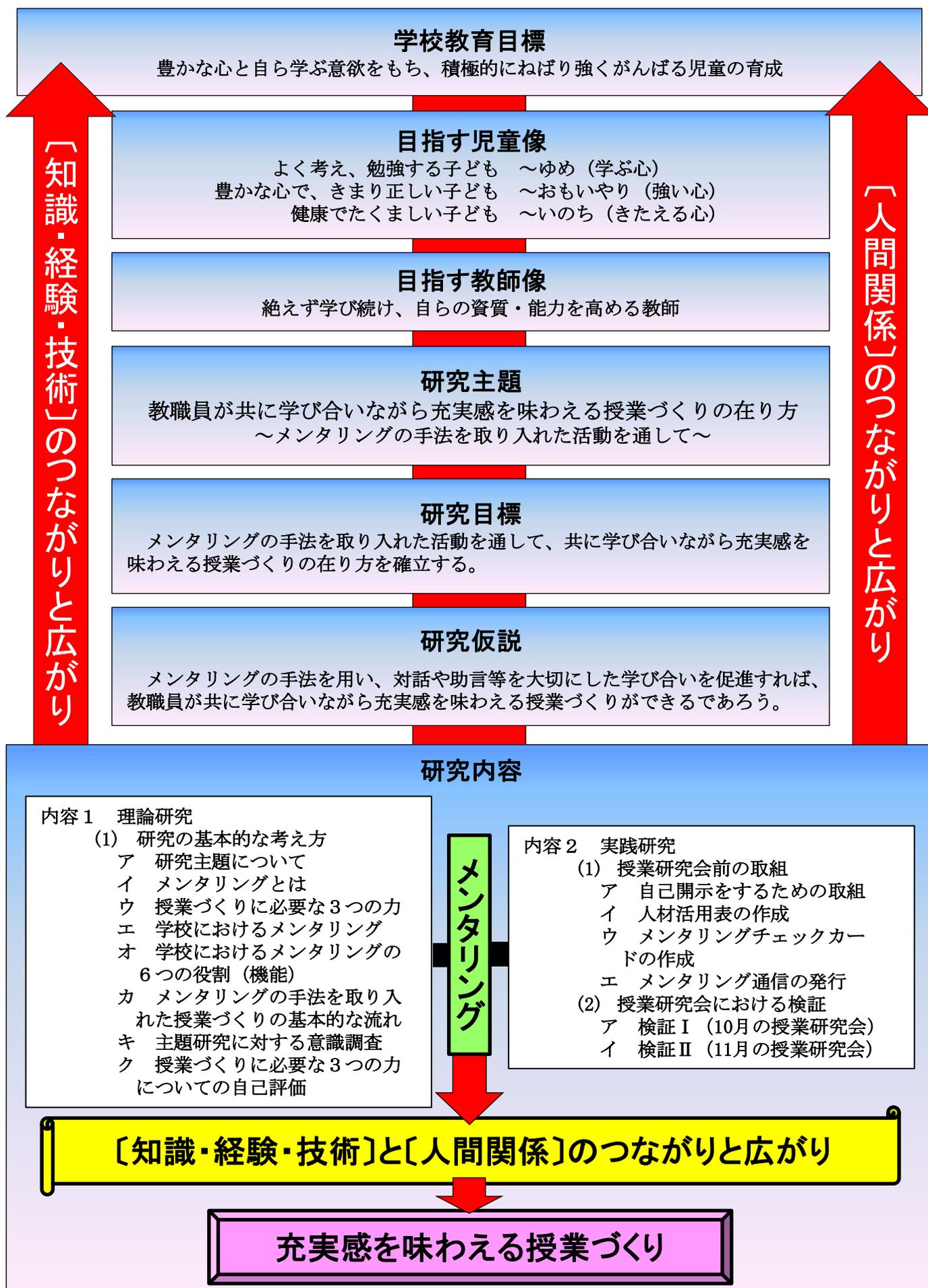
メンタリングの手法を取り入れた活動を通して、教職員が共に学び合いながら充実感を味わえる授業づくりの在り方を確立する。

Ⅳ 研究仮説

メンタリングの手法を用い、対話や助言等を大切にした学び合いを促進すれば、教職員が共に学び合いながら充実感を味わえる授業づくりができるであろう。

Ⅴ 研究計画

月	研究内容	研究事項	研究方法	備考
4	○ 研究の方向性	○ 研究主題・副題の設定 ○ 研究仮説・研究内容検討	○ 文献研究 ○ 理論構築	
5	○ 研究の方向性	○ 研究仮説・研究内容検討	○ 文献研究 ○ 理論構築	
6	○ 職員研修資料準備 ○ 実態把握	○ 研究仮説・研究内容検討 ○ 調査内容・調査方法の検討	○ 文献研究 ○ 理論構築 ○ 実態調査作成	
7	○ 実態把握 ○ 職員研修	○ 実態調査の実施・分析 ○ 職員研修の実施	○ 実態調査の集計・分析 ○ 職員研修の実施	都城市立西小学校
8	○ グループ協議会資料準備	○ 配付資料・発表原稿作成	○ グループ協議会用配付資料・発表原稿作成	
9	○ グループ協議会 ○ 理論の再構築	○ グループ協議会での中間発表 ○ 検証内容検討・準備	○ 授業内容の検討	
10	○ 検証Ⅰ	○ 検証内容検討・準備	○ 検証内容の実施・事後研究	都城市立西小学校
11	○ 検証Ⅱ	○ 検証内容の実施・事後研究 ○ 全体協議会での発表内容検討	○ 検証内容の実施・事後研究 ○ 全体協議会用資料作成	都城市立西小学校
12	○ 全体協議会 ○ 実態調査	○ 実態調査の実施・分析	○ 変容把握	
1	○ 研究のまとめ	○ 研究報告書の作成	○ 研究報告書の作成	
2	○ 研究のまとめ	○ 研究発表会資料等作成	○ 研究内容の整理 ○ パネル作成	
3	○ 研究発表会	○ 研究のまとめと反省	○ まとめ・反省の作成	



Ⅶ 研究の実際

1 理論研究

(1) 研究の基本的な考え方

ア 研究主題について

(ア) 「学び合う」とは

「学び合う」とは、目標や目的を共有し、協力し合う関係を築きながら、お互いに新しい情報を得ることができたり、それまでとは違った見方・考え方ができるようになったりすることと捉える。

※ 「新しい情報」や「それまでとは違った見方・考え方」は、授業で扱う教材や学習内容についてだけでなく、「自分にはない考えをもつ人だ」「そんな意味もあったのか」というような周囲の人や自分自身に関することも含んだものである。

(イ) 「充実感を味わえる授業づくり」とは

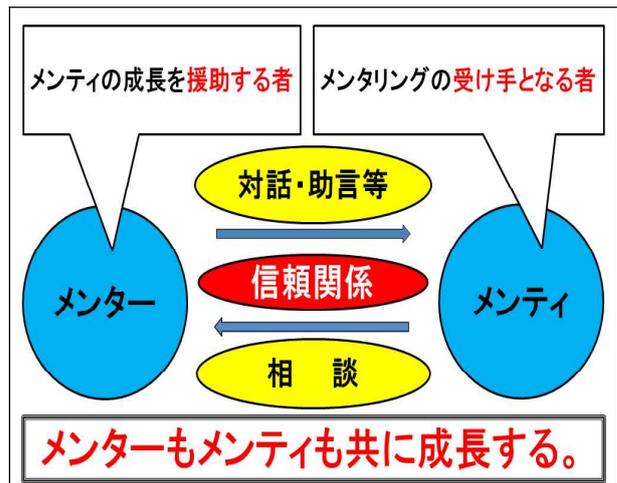
「充実感を味わえる授業づくり」とは、お互いに学び合うことができたことや子どもが成長したという成果を分かち合える授業づくりと捉える。

イ メンタリングとは

メンタリングとは、指示や命令によらず、対話による気付きと助言等によって、相談者の自発的・自立的な発達を促す人材育成法である。

【図1】で示すように、メンタリングにおいては、成長を援助する者をメンター、その受け手となる者をメンティという。対話や助言などを繰り返しメンティの成長を促す中で、メンター自身もこれまでの自分の考えを再構築するといった活動もあることから、メンタリングは、メンターもメンティも共に成長していくものである。

【図1】メンタリングの基本パターン

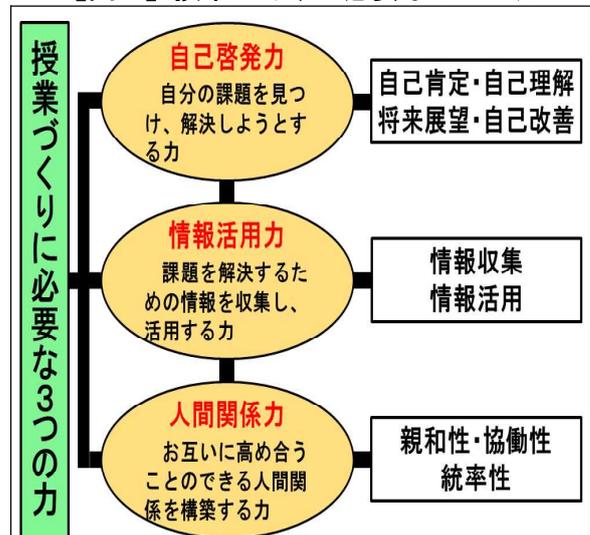


ウ 授業づくりに必要な3つの力

よりよく授業づくりを進めていくには、自分の課題を見つけ、解決するために必要な情報を収集して活用していかなければならない。そのような活動を行うためには、時として他の職員から情報を得たり、お互いに認め合ったり、高め合ったりすることのできる人間関係も重要になってくる。

そこで本研究では、授業づくりには「自己啓発力」「情報活用力」「人間関係力」の3つが必要であり、それぞれの力は、【図2】で示す要素をもつものと定義した。この3つの力を高めることは、よりよい授業づくりのみならず、校務分掌等において自分の役割を果たす際にも生かされていくものと考え。

【図2】授業づくりに必要な3つの力



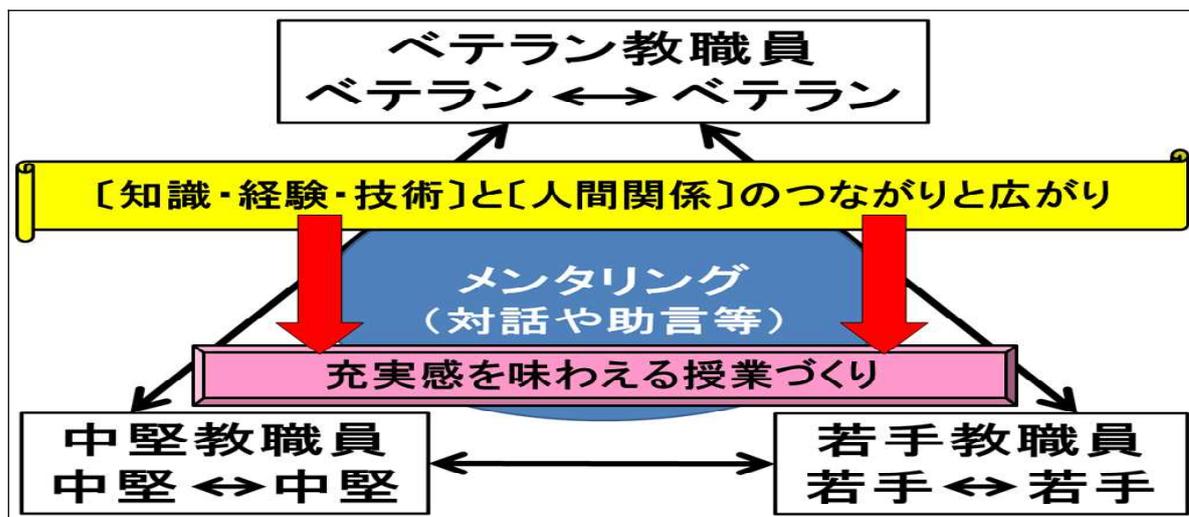
(参考:「自ら授業力を高める校内研修マニュアル」平成23年 名古屋市教育センター)

エ 学校におけるメンタリング

OJTは、一般に、職場の上司や先輩が部下や後輩に対し、具体的な仕事を通じて、職務に必要な能力を組織的・計画的・継続的に指導し、修得させることによって、全体的な業務処理能力や力量を育成する活動といわれている。よってメンタリングにおいても、一般的に経験豊富な者がメンター、少ない者がメンティとなる。

しかし、学校においては、これまでの学年や校務分掌等の経験によっては、経験年数の多い者がメンタリングの受け手となる場合も存在するため、先輩から後輩に対して一方的に行われるものではなく、年齢や経験年数に関係なく、双方向にメンタリングが行われるものとする【図3】。このことは、メンターもメンティも共に成長するものであるという本研究のメンタリングの基本的な考え方に基づくものであり、「教える－教えられる」関係だけではなく、「学ぶ－学ぶ」関係、「一緒に考える」関係を大切にしていくことを意味している。

【図3】学校におけるメンタリングのイメージ



オ 学校におけるメンタリングの6つの役割（機能）

学校でのメンタリングの役割（機能）を【表1】の6つに分類した。これらの6つの役割（機能）は、これまでも授業研究会の場をはじめ、学校のあらゆる場で行われてきたことであるが、それらを互いが意識して取り組むことで、互いの知識・経験・技術が継承され、さらなる資質向上が図られるとともに、職員同士の結び付きも強くなり、互いに前向きに教育活動に取り組めるようになることを考える。

【表1】学校におけるメンタリングの6つの役割（機能）と具体的な言葉かけの例

6つの役割（機能）	具体的な言葉かけの例
★ コーチング（指導をすること） メンティの実践の改善や向上を実現させるために、授業づくりに必要な技術や方法に関するメンティの学習を促すこと。	「小数のたし算の筆算では、小数点をそのまま下におろすことを黒板に白色ではない色で書いて強調した方がいいね。」
★ アセスメント（現状を分析し、その結果を示すこと） メンティによる目標設定や振り返りを通じた自分自身に対する気づきを促すために、メンティの実践についてのデータを収集し、それを分かりやすい形で提示すること。	「〇〇先生の学級の児童の実態として挙げられている、『既習事項を生かせない児童が多い』ということから導入の段階の手立てを考える必要があるね。」
★ ネットワーキング（結び付けること） メンティの成長にとって必要な人、情報などを紹介し、メンティと結び付けること。	「〇〇先生に聞いてみたり、『〇〇』という本を読んでみたりするといいよ。」
★ ファシリテティング（促進すること） メンティにやりがいのある仕事や役割を割り当てて活躍の場を提供したり、日々の実践を見せたりすることにより、メンティのチャレンジを後押しすること。	「一緒に考えたいから、私の授業を見に来てごらんよ。」

<p>★ ガイディング（案内役をすること） メンティがメンターの支援がなくても、自立的な教師として実践を積み重ねることができるよう促すこと。</p>	<p>「△△先生は、どんな授業にしたいのかな？先生はいつも子どもと遊んで交流しているから、そこで得た情報が授業で生かせるといいね。それは、今度の研究授業だけでなく、これからの教育活動にも生かされることだよ。」</p>
<p>★ カウンセリング（心理的な援助を提供すること） メンティが教職の経験を積んでいく中で感じている不安や悩みなどを共感的に傾聴し、その解決や不安の軽減に向けて共に取り組んでいくこと。</p>	<p>「△△先生は、授業のことで困っているんだね。私も同じような経験をしたことがあるよ。悩んだり苦しんだりすることは、成長しているということだよ。いい経験をしていると思うことが大切だよ。」</p>

カ メンタリングの手法を取り入れた授業づくりの基本的な流れ

メンタリングの手法を効果的に取り入れて授業づくりを進めていくためには、PDC Aサイクルに基づいて、目標と評価の一体化を図りながら実践していく必要がある。その際、メンティは自己開示し、自分の現状をメンターに伝えることから始め、メンターはその現状を踏まえて、それに適した支援を行っていかなければならない。また、メンタリングを通して互いの知識・経験・技術がつながり、広がっていくことのみならず、人間関係もつながり、広がっていくことをイメージしておくことが重要である。基本的な流れについては【表2】の通りである。

【表2】メンタリングの手法を取り入れた授業づくりの基本的な流れ

メンティ	メンター
P（計画）	
1 自分自身の実態（抱えている課題・長所・短所等）を明確にし、自己理解を深める。	
2 1で明らかになったことを互いに共有し合い、相互理解を深めるとともに、信頼関係を築いていく。	
3 自分の目標を設定する。	
4 自分の現状（課題や悩み等）や目標などをメンターに伝え、対話や助言等で出された意見をもとに今後の取組内容を決定する。	4 自分のこれまでの実践や、メンタリングの6つの役割（機能）をもとに、メンティに対して何ができるのか考え、メンティと共に取組内容を決める。
D（実践）	
5 対話や助言等から得られたことを生かしながら、授業を実践する。	5 メンティの授業等の様子を参観したり、実践の様子について話を聴いたりする。また、自分の実践を見せたり、体験を語ったりする。
C（評価）	
6 メンティが実践した授業についての評価だけでなく、メンターもメンティに対する自分の関わり方についても振り返り、自己評価を行う。	
A（改善）	
7 自己評価を基にして新たな手立てを考えたり目標を設定したりして、確認し合う。	

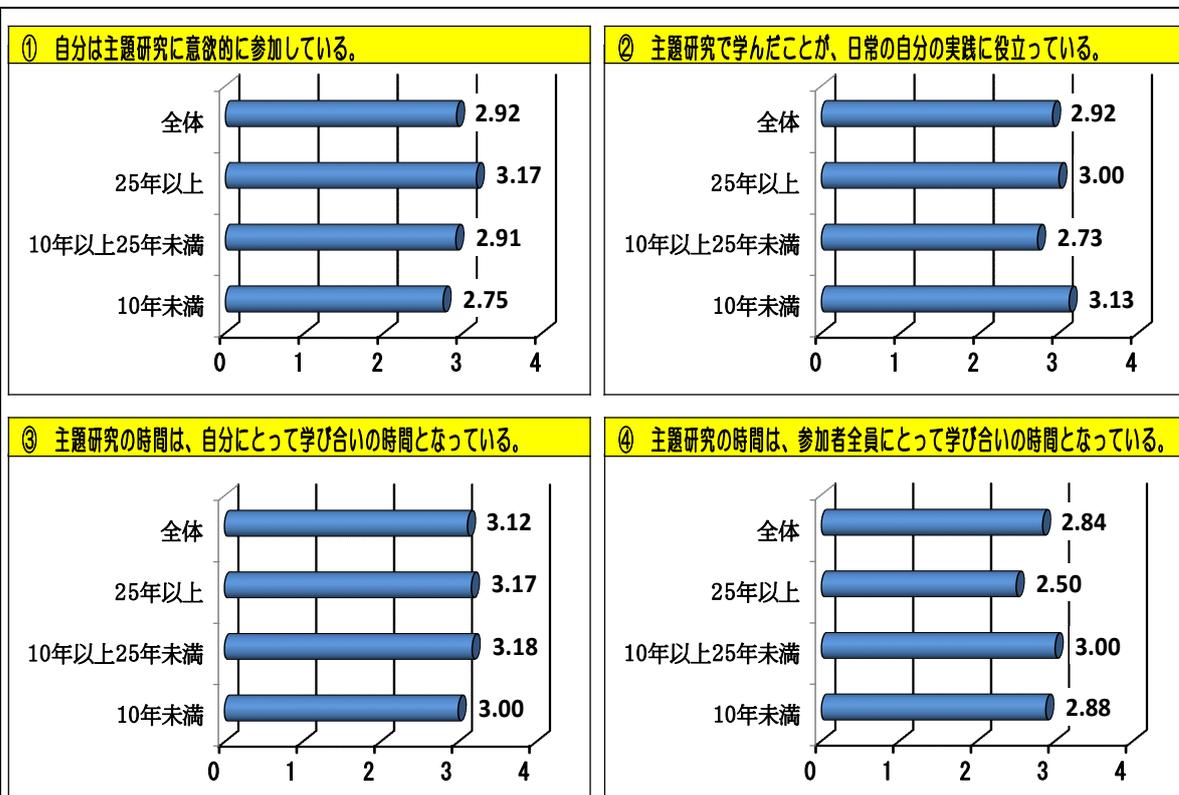
※ 実施に際しては、主題研究に関する内容で実践する場合は研究主任が全体の推進役を務めるほか、学年会の中で学年主任が中心となって進めるなどの方法がある。日常の業務における既存の役割を果たす中で授業づくりについての学び合いが促進されていくことが大切であり、推進する役割が負担とならないように配慮する必要がある。なお、校務分掌等、授業づくり以外にも学び合いは存在し、この流れは様々な場面で活用できるものである。

キ 主題研究に対する意識調査

本研究において、主題研究の場で組織的・計画的・継続的にメンタリングを進めていくことから、7月に所属校の全職員を対象に現在の主題研究に対する意識調査を実施した。

学校全体及び経験年数から見た傾向は以下の通りである。

※ 4（あてはまる）・3（どちらかといえばあてはまる）・2（どちらかといえばあてはまらない）・1（あてはまらない）の4段階で評価し、1もしくは2と評価した項目については、その理由を記述するという形で行った。表内の数値は評価の平均値である。



☆ 「1」もしくは「2」と評価した理由
(教職経験25年以上)

○ 発言している人に偏りがあるので、参加者全員にとって学び合いの時間になっているとはいえない。

(教職経験10年以上25年未満)

○ 全員にとって学び合いになっているようには見えない。

(教職経験10年未満)

○ 他の先生方の意見を理解するのに精一杯で、自分があまり発言をしていないから、意欲的に参加しているといえないし、参加者全員にとって、学び合いになっているともいえない。

考察

全体の傾向としては、主題研究に積極的に参加し、その場がお互いにとって学び合いの場となっていると感じている教員が多い。しかし、経験年数別に見てみると、経験年数10年未満の教員は、「自分があまり発言していないことから、積極的に参加していない」と感じていること、教職経験25年以上の教員は、「意見を出す人に偏りが見られることがあることから、自分が学ぶことはできているが、参加者全員にとって学び合いとはなっていない」と強く感じていることが分かった。ただし、このことは「学ぼうとする意欲が低い」「学ぶことがない、少ない」ということではなく、「どのようなことを学んだのか」や「お互いを認め合っていること」を表現する機会、知る機会が少なかつたためであると考えられる。

このことから、全職員が積極的に発言し、主題研究で学んだことやお互いに認め合っていることを共有し合う手立てが必要であるといえる。

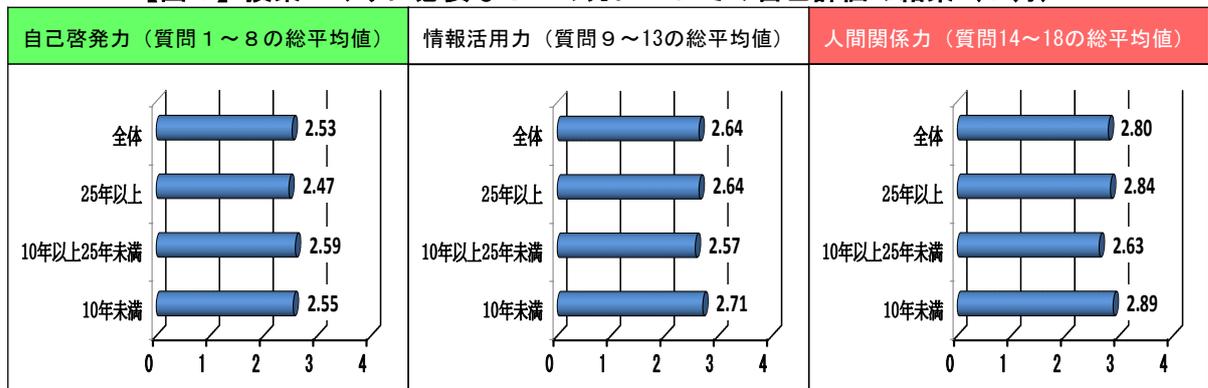
ク 授業づくりに必要な3つの力についての自己評価
 7月に授業づくりに必要な3つの力（自己啓発力・情報活用力・人間関係力）についての自己評価（評価項目は【表3】参照）を行った。
 3つの力のそれぞれの学校全体及び教職経験年数から見た傾向は、【図4】の通りである。

【表3】授業づくりに必要な3つの力についての自己評価項目

		評価項目 ※7・11・14は同じ質問。また、13・15も同じ。
自己啓発力	自己肯定	1 自分の持ち味を生かして教育活動を行っている。 2 自分自身が楽しく教育活動を行っている。
	自己理解	3 自分自身の教育活動を振り返り、課題を明確にしている。 4 自分の目標を明確にし、その目標が達成できたかどうか自己評価している。
情報活用力	将来展望	5 理想とする教師像や、目標とする先輩教師を思い描きながら教育活動を行っている。 6 理想とする教師像や、目標とする先輩教師に近づこうと努力している。
	自己改善	7 自分の課題解決のために、他の先生の授業等の様子を見たり、助言を受けたりしている。 8 自分の課題解決のために、他の先生に授業等の様子を見てもらっている。
人間関係力	情報収集	9 よりよい教育活動のために、子どもの実態把握に努めている。 10 自分の課題解決のために、資料や書籍を読んで参考にしてしている。 11 自分の課題解決のために、他の先生の授業等の様子を見たり、助言を受けたりしている。
	情報活用	12 学んだり調べたりしたことを生かして、教育活動を進めている。 13 他の先生の教育活動に興味をもち、考え方や手立てを理解し、そのよさを見出そうとしている。
人間関係力	親和性	14 自分の課題解決のために、他の先生の授業等の様子を見たり、助言を受けたりしている。 15 他の先生の教育活動に興味をもち、考え方や手立てを理解し、そのよさを見出そうとしている。
	協働性	16 他の先生方と連携を図りながら教育活動を進めている。 17 他の先生方への接し方を振り返り、よりよい人間関係を築こうと努力している。
人間関係力	統率性	18 職員の話合いでは、他の先生方の話に耳を傾けたり、自分の意見を述べたりして、話合いの成果を導き出そうとしている。

（参考：「自ら授業力を高める校内研修マニュアル」平成23年 名古屋市教育センター）

【図4】授業づくりに必要な3つの力についての自己評価の結果（7月）



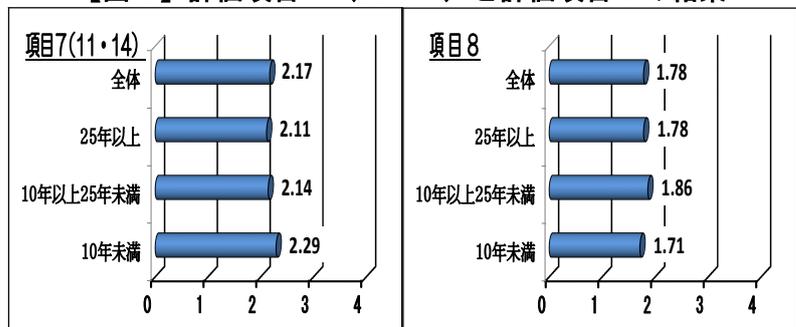
考察

3つの力の中で、人間関係力が最も高い数値となっており、人間関係を大切にしながら、日常の教育活動が行われていることが分かった。

しかし、全体的に【図5】で示す通り、「授業等の様子を見る、見せる」に関する項目の数値が低い。これは、時間的なゆとりがないこと、授業を見せるとなると躊躇すること、授業を見たくても頼みづらいことが主な原因であると考えられる。

これらのことから、お互いの教育実践を公開し合ったり、実践について積極的に話題にしたりするための手立てが必要であるといえる。

【図5】評価項目7（11・14）と評価項目8の結果



2 実践研究

<はじめに>

本校では10月と11月に主題研究に関わる研究授業（検証授業）が行われるため、11月の授業者（2年・4年・5年）をメンティ、それ以外の先生方をメンターとして、1～6ページで示した「メンタリングの手法を取り入れた授業づくりの基本的な流れ」に沿いながら主題研究での授業づくりにおいて実践及び検証を行った。

主題研究の授業づくりの中にメンタリングを取り入れる理由（よさ）としては、以下の4点が挙げられる。

- 共通した1つの目標（研究の目標）に向かって進められるものであるということ
- 教師の資質の根幹ともいえる授業力の向上が図られること
- 主題研究の授業づくりという場を起点とすることで、日常的な学び合いを促進できること
- 既存の組織（学年部）が活用できること

なお、実践・検証については、本校の主題研究の年間計画に基づき、10月と11月のそれぞれの月で行われる「第1回指導案検討→第2回指導案検討→事後研究会」という授業研究会の流れの中で行っていく。

(1) 授業研究会前の取組

ア 自己開示をするための取組

10月からの授業研究会に向けて、まずはメンタリングについて、職員の共通理解を図る必要がある。そのため、夏季休業中に職員研修を実施した。

その研修の中では、メンタリングにおいては、特に「自己開示」することが大切であることを伝えた。そして、お互いに自己開示することで、自分の悩みや課題に寄り添った支援を受けられるようになり、持ち味を生かした授業実践につながっていくことについて共通理解を図った。

自己開示をするには、まず自分自身のことを知っておく必要があることから、「セルフエスティームチェックシート【図6】」のほか、「授業のポイントチェックシート」「自分の目標設定シート」を使用しての演習を行った。

【図6】セルフエスティームチェックシート

セルフエスティームチェックシート		氏名()
<small>あなたは、自分や人々どのように評価しているだろうか。いつも思う。…3 時々思う。…2 あまりそう思わない…1 全くそう思わない…0を空欄に記入し、A、B、C、Dそれぞれの合計得点を集計してみましょう。</small>		
A	1 自分は、人より優れているところがある。	
	2 自分は、自分から行動することができる。	
	3 自分は、今の自分に満足している。	
	4 自分は、努力すれば向上することができる。	
	5 自分は、自分に自信がある。	
	6 自分は、個性的である。	
		Aの合計
B	7 自分は、生まれ変わったら別の人間になりたい。	
	8 自分は、他人をうらやましく思う。	
	9 自分は、自分が嫌になることが多い。	
	10 自分は、思い出したくないことがある。	
	11 自分は、このままではいけないと思う。	
	12 自分は、失敗すると自分のせいだと考える。	
		Bの合計
		Cの合計

イ 人材活用表の作成

日常的な学び合いを促進するには、どの職員がどのような持ち味（知識・経験・技術・長所等）をもっているのかを知っておく必要があるため、夏季休業中に【図7】のような人材活用表を作成した。

他の先生の授業を参観したい、話を聴いてみたいと思うことがあった時に、一覧表を見て実践をお願いできる職員を探したり、

誰かに相談を受けた時、他の職員の実践を紹介したりするという使い方をする。

【図7】人材活用表

		職員名
実践内容	国語の授業での読み取りのさせ方・読み取る力の高めさせ方	○
	国語の教材文分析の仕方	○
	社会の子どもたちの自主的な活動のさせ方	
	算数でのノートの話し合いを活性化させる手立て・算数の時間の	

自分が実践できるものに○を付ける。

ウ メンタリングチェックカードの作成

自分自身の取組の様子を振り返り、その後の取組の目標を立てるため、また、日頃からメンタリングの6つの役割（機能）を意識できるようにするため、メンタリングチェックカード【図8】を作成した。

なお、このカードにある項目は、教職員評価制度に基づいて使用する評価シートの項目との関連が強いものとなっている。評価シートは、「専門性」「教職員としての基本姿勢」「学級経営や組織への参画・貢献」「自分の担当業務」について自己評価するものであり、「個人目標の設定→目標設定ミーティング→中間ミーティング→フィードバック面談」という年間スケジュールに基づいて活用されていくものである。よってメンタリングチェックカードを使用することは、組織的・計画的・継続的に学び合いが進むこと、主題研究での学び合いが日常での学び合いに広がっていくこと、学び合いの内容が主題研究の内容以外にも広がっていくことにつながると期待できる。

【図8】 メンタリングチェックカード（メンター用）

メンタリングチェックカード(メンター用) (低 中 高 学年)							
		20代	30代	40代	50代以上	教職経験(10年未満 10年以上25年未満 25年以上)	
		1…あてはまる		3…どちらかといえばあてはまる		2…どちらかといえばあてはまらない	
役割(機能)	観	点				評 価	
コーチング	1	授業者の授業の計画等に積極的に関わっているか。				4	3 2 1
	2	授業者に授業のポイント等を分かりやすく伝えているか。				4	3 2 1
	3	授業者の実践のよさを認め、課題を明確にしているか。				4	3 2 1
アセスメント	1	授業者が実践に対する実態把握を正確に行えるように、分析する視点を与えているか。				4	3 2 1
	2	授業者が実践に対する自己評価を適切に行えるように、ともに考えているか。				4	3 2 1
	3	授業者が課題を解決しようとする気持ちを支えられているか。				4	3 2 1
	4	授業者が課題解決をするために、どのようなスキルや考え方を身に付ければよいか適切に示しているか。				4	3 2 1
	5	授業者が必要とする情報を取得できるよう、収集方法や活用方法について具体的に示しているか。				4	3 2 1
チェック	1					4	3 2 1

【図9】メンタリング通信

エ メンタリング通信の発行

職員研修の内容等について、適宜「メンタリング通信【図9】」という形にして伝えることとした。このことにより、目標の共有化や持続化、人材活用の活性化が図られたり、記事の内容を話題にして人間関係が深まったりすることにつながると考える。

また、掲載内容をそれぞれが実践することにより、資質の向上も図られると考える。



9月末（授業研究会前）までのア～エの実践を、10月からの授業研究会に向けての「土台づくり」とし、土台づくりでの取組の様子を整理し（下枠内参照）、今後の研究を進めていくこととした。

- 自己開示を図る際の各チェックシートや人材活用表作成のためのアンケート記入では、ほとんどの職員が、自分の持ち味（知識・経験・技術、長所等）を「恥ずかしくて書きづらい」「自分ではよく分からない」「自信がない」等の理由から進んで書くことができていなかった。お互いに認め合える手立てを講じる必要がある。
- 研修の感想等を知らせたことで、メンタリング通信が、日頃伝えることができない考えや思いを知ることができ、お互いに学び合えたことを感じられるもの、知識・経験・技術の継承の架け橋となるものとなっている。情意面だけの高まりで終わることのないよう、実践に向けてステップアップさせていく必要がある。
- メンタリングチェックカードによって、メンタリングを意識することの必要性を共通理解させることができた。主題研究の時間だけでなく、日常的に意識させるための手立てが必要である。

(2) 授業研究会における検証

ア 検証Ⅰ（10月の中学年部の授業研究会）

<期日>

- 10月2日（第1回指導案検討）・23日（第2回指導案検討）・30日（事後研究会）

<検証の視点>

- 主題研究の話合いの中で、メンタリングの6つの役割（機能）が果たされているか。

<検証授業（第3学年）>

- 単元名 あまりのあるわり算

- 本時の目標

あまりを切り上げて処理する問題を理解し、活用できるようになる。

7月に実施した主題研究に関する意識調査や、9月までの実践の傾向から、主題研究において「どのようなことを学んだのか」や「お互いを認め合っていること」を表現する機会、知る機会を増やす必要があることが分かった。そこで、主題研究の時間の中に5分程度「感想を書く」時間を設定し、後日、メンタリング通信で知らせるという手立てをとった。また、通信にはメンタリングの6つの役割（機能）への意識を啓発する内容も記載した。これらは、対話や助言等を大切にしたい学び合いを促進するということを目指した手立てでもある。

なお、主題研究の時間に自分の考えを述べたり、感想に自分の思いを書いたりすることを、「自己開示」の1つと考える。

検証Ⅰでは、「感想を書く」「メンタリング通信の発行」という手立てが効果的であったかを、授業研究会で録音したすべての発言と提出された感想に書かれた内容を分析・考察すること及びメンタリングチェックカードの自己評価結果を考察することで「メンタリングの6つの役割（機能）を意識して学び合っているか」について検証していく。

(7) 第1回指導案検討会の様子から

主な発言や感想（□…授業（授業者）に対する意見、◇…検討会全体の様相に対する感想）

※ □や◇の中の言葉は、メンタリングの6つの役割（機能）を表す。例 回…コーチング

回 わり算だと考えた根拠となる言葉（～ずつ）に目を向けさせる発問が大切である。

回 導入段階で、本時の学習内容と前時までの学習内容との違い（ズレ）を意識させる発問をしなければならない。

回 学習内容の定着化・一般化を図るには、練習問題が2問は必要。

回 ドリルを活用してはどうだろうか。

回 絵や図を描いて考えることについての児童の実態は？

回 授業者の提案通り、本時の学習内容をしっかり理解させるには、児童の実態を考慮すると、年間指導計画よりも1時間増やして授業をするとよいと思う。

◇ ベテランの先生方が多いので、どの意見も納得できるものであった。

◇ 各人が思ったことを述べ合い練り合える学年部会になっていると思う。

考察

上記以外のもも含め、出された意見をすべて分類した結果、授業（授業者）に対する意見は、すべて「コーチング」あるいは「アセスメント」の役割を果たしているものであった。参加者が指導案を初めて目にして授業者の考えを知り、授業者の説明を基に意見交換を行う会であったので、これは当然の結果と考える。

検討会全体の様相に対する感想（◇印）は、協力体制の状態に関する内容であり、「ネットワーキング」の役割（機能）を果たしているものであると考える。メンタリングを取り入れる前もこのような思いはあったと考えられるが、これまでこのような発言はなかった。感想を「書く」ことで、そのことが明確になった。今後の学び合いを促進させるためにこの手立ては意義のあるものと考えられる。

感想の記述に、「他の先生方からの意見で、授業の見通しをもててありがたい」というものがあつた。これは検討会で出された発言が、他の先生にとっては悩みや不安を解消するものであること、つまりメンタリングの6つの役割（機能）の中の「カウンセリング」の役割を果たしているものであることを表していると考えられる。

(イ) 第2回指導案検討会の様子から

事前にメンタリング通信にて、「認め合うことで研修意欲につながる」「自分の実践に生かせることが明確になる」といった感想を書くことのよさを伝えた。

また、第1回の指導案検討会で出された意見は、メンタリングの6つの役割（機能）の中の「コーチング」と「アセスメント」に偏っていたので、それら以外の役割（機能）も意識してほしいことも伝えた。

なお、この会の前に、研究授業を行う先生の作成した指導案通りに、他の学級の先生が自分の学級で事前授業を行い、同じ学年部の先生方が参観している。

主な発言や感想

- ㊦ 実際に授業をしてみると、視覚教材が効果的であると感じた。
- ㊦ 文章を書いて説明することだけにこだわらず、絵や図、具体物操作等、子どもたちに自由に説明させてもよいのではないか。
- ㊦ 立式が先で、具体物操作が後になってしまっていたが、題意をしっかりと把握させるには、具体物操作が先の方がよいのではないか。
- ◇ 事前授業の後ということもあり、それぞれが自分の経験に基づきながら具体的な話し合いができていた。
- ◇ 思考力を伸ばし、表現力を身に付けさせていこうとする試みが大変素晴らしく、学ばせてもらっている。
- ◇ 子どもに説明させる時、複数の方法を提示して子どもに選択させる等、自分にとって新しい知識を得られる研修会であった。

考察

事前授業が行われた後の検討会ということもあり、「自分の日々の実践を見せること等により、メンティの実践を促進する」という「ファシリテーターティング」の役割（機能）が果たされたことが分かる意見・感想が出され、果たされている役割（機能）が広がった。

なお、事前授業者の意見・感想がこの役割（機能）に分類されているが、事前授業者以外からも「私も授業をして…」という意見・感想が出され、この役割（機能）に分類している。このことは、単に事前授業を行って指導案検討をするという本校の主題研究の計画によってこの役割（機能）が増えたのではなく、「自分でも実践しよう」「研究授業者に協力しよう」という意識が高まっていることが分かるものであるといえる。

「◇…自分にとって新しい知識を得られる研修会であった」という感想は、協力体制が構築できていることを感じていることが分かるものであり「ネットワーキング」の役割（機能）を果たしていると分類できる。この役割（機能）に対する意識の高まりについては、全員が意見を出している姿からも感じられた。

(ウ) 事後研究会の様子から

主な発言や感想

- ㊦ 視覚教材は効果的であった。しかし、それを必要としない子どももいるので、支援を必要とする子にだけ見せる等、活用の仕方を改善する必要がある。
- ㊦ あまりが1でない問題に変更した方がよかったのではないか。
- ㊦ 「きゃく」という単位や「長いす」は、3年生の子どもにとって身近ではないものであったと感じた。
- ㊦ あまりをそのまま足してしまうという間違いをしている子どもがいた。これは、誰が授業しても起こりうることである。その原因をしっかりと話し合うことが大切である。
- ◇ 指導案検討のほかに、教材作成の時間があると、さらに知識や経験の交流ができるのではないかと思う。
- ◇ 授業者と同じ学年の先生方が、自分の学級で授業をした時の子どものつぶやき等を具体的に紹介してくださったことで、今日の授業の成果や課題が明らかになった。

考察

前述◇（「指導案検討…」「授業者と…」）の感想は、今後さらに学び合いを深めたい気持ちやお互いを認め合う気持ちが伝わるものであり、「ネットワーキング」の役割（機能）が果たされたものといえる。

また、視覚教材の効果や子どもたちの説明のよさにふれた意見は、これまでの検討会で出された意見が実を結んだ成果であり、協力体制が構築されていることを表しており、このことも「ネットワーキング」の役割（機能）が果たされたものである。

「□ あまりをそのまま…誰が授業しても…」 「指導案検討のほかに、…さらに知識や経験の交流ができる…」 という発言は、参加者全員に今後の見通しをもたせる「ガイディング」の役割（機能）が、色濃く出ているものである。

(エ) 10月のメンタリングチェックカードの自己評価から

各個人の9月末と10月の自己評価の結果を基に、メンタリングチェックカードの役割（機能）別に、自己評価した点数の平均値を比較した【表3】。

【表3】メンタリングチェックカードの自己評価の比較 (単位：点)

	コーチング	アセスメント	ネットワーキング	ファシリテティング	ガイディング	加地リング
9月末	2.13	2.07	2.17	2.11	2.27	2.37
10月末	2.21	2.14	2.30	2.40	2.30	2.39

考察

前述したように、9月末までの土台づくりにより、主題研究にメンタリングを取り入れることの必要性を共通理解した状態で授業研究会が始まり、第1回指導案検討会→第2回指導案検討会→事後研究会の流れの中で出された意見・感想では、6つの役割（機能）が「コーチング」「アセスメント」に偏っていた状態から、徐々に他の役割（機能）も果たされていったことがはっきりしている。

ところが、6つの役割（機能）の数値がすべて高くなってはいるが、それほど伸びが見られなかった。上述した検討会の意見・感想や9月末の感想の実態から考えると、数値がそれほど変容しなかったのは、どの発言がどの役割（機能）を果たしているかについての共通理解ができていなかったことによるところが大きいと考える。

また、9月末までの実践の傾向（1-10ページ参照）で挙げた「自分のよさは書きづらい」「自信がない」といった実態が改善されていないことも原因であると考えられる。

【表3】の数値では、メンタリングの6つの役割（機能）の平均値には差がそれほどなく、6つの役割（機能）の中で、特に果たされたといえる役割（機能）がないことも分かった。これは、メンタリングの6つの役割（機能）が1つの発言の中に複数含まれていることもあることが関係していると考えられる。

(オ) 検証Iでの成果と課題

- メンタリングチェックカードにより、自分の果たすべき役割を意識し、積極的に授業者と関わろうという意識が高まり、発言内容も他者を意識したものへと変容した。
- 主題研究の感想をメンタリング通信で伝えた後に、「自分もやってみようと思った」「他の先生と関わり合う機会が増えた」という感想が寄せられ、お互いに学び合っているという実感をもたせることができた。
- 自分の発言が、メンタリングの6つの役割（機能）の中のどの役割（機能）を果たしているのが共通理解されていなかった。自己評価と発言内容とを近づけるための手立てが必要である。
- メンタリングの6つの役割（機能）を意識していても、意見を積極的に述べないなど、依然として取り組み方に差が見られる。個に応じた手立てが必要である。
- 授業者の悩みについてふれる発言、よさを生かそうという発言は、ほとんど出されておらず、授業者の持ち味を生かしきれていない面がある。授業者とそれ以外の先生方の思いや考えを重ね合わせる意識を高める必要がある。

イ 検証Ⅱ（11月の中学年部の授業研究会）

<期日>

- 11月13日（第1回指導案検討）・20日（第2回指導案検討）・27日（事後研究会）

<検証の視点>

- メンタリングの6つの役割（機能）を意識して学び合うことが、授業力向上につながっているか。

<検証授業（第4学年）>

- 単元名 垂直・平行と四角形
- 本時の目標
作った四角形を辺の平行関係に着目して分類し、台形、平行四辺形の意味を理解することができる。

検証Ⅰの結果で、メンタリングの6つの役割（機能）に対する意識が高まっていることや、6つの役割（機能）が1つの発言に複数含まれていることが分かった。また、前ページで示した自己評価の結果から、6つの役割（機能）の中で、特に顕著に果たされている役割（機能）がないことも分かった。

そこで、検証Ⅱでは、6つの役割（機能）の中のどれかに重点を置いた手立てではなく、一人一人の考えや思いを表現する機会を増やすことができれば、6つの役割（機能）は全体的に果たされていくという前提のもと手立て（後述）を考えた。

なお、検証方法としては、検証Ⅰと同じ方法に加え、児童対象の意識調査の結果も考察することにした。このことから「メンタリングの6つの役割（機能）を意識して学び合うことが、授業力向上につながっているか」について明らかにしていくこととした。ただし、さらに主題研究の場でそれぞれの思いや考えを知ることを目指して「感想を書く」時間を「感想を言う」時間に変更して実施している。

(ア) 第1回指導案検討会の前に

検証Ⅰでの結果を踏まえ、11月の第1回指導案検討前に4つの手立てを講じた。

① 「学び合い」についての共通理解

意見を積極的に言えない職員がいるという実態から、「優れた実践を言わなければならない」「自分の知っていること、実践していることに自信がない」という思いがあることがうかがえた。

そこで、全体的にさらに活発な意見交換が促進されることをねらって、メンタリング通信で、自信がないこと、自分が困っていることを質問することも「学び合い」を促進する1つの重要な発言であることを伝えた。

また、本校の算数科の学習をテーマにして主題研究を進めているが、教師の立ち位置や視線のくせ、子どもに対する姿勢や鉛筆の持ち方の指導、教室環境（整理整頓や掲示物等）、生活習慣など、算数以外のことに目を向けた意見であっても、1単位時間の授業を支える重要な要素であることも知らせた。これは、様々な観点を与えることで自分の意見をもちやすくすることをねらった手立てである。

② SWOT分析の実施

検証Ⅰの様子から「授業者とそれ以外の先生方の思いや考えを重ね合わせる意識を高める必要がある」という課題が明らかになった。

そこで、授業者に自分自身や自分の身の回りの長所（よさ）や短所（課題）を書いてもらい、その結果を同じ学年部の先生方に知らせる（自己開示）するようにした。

予め授業者の特徴を知ること、授業者の悩みに寄り添った支援や、授業者の長所（よさ）を生かした授業を展開するための支援ができるようになることをねらった手立てである。

【図11】SWOT分析の結果



③ ブレインライティングの実施

事前に研究授業で取り扱う内容を知り、その時間の指導に関するアイデア等を参加者全員が記入する【図12】ことで、「知識、経験、技術の継承」「人間関係の深まり」が促進できるようにした。

自分の考えを書くことは、自己啓発力や情報活用力が発揮されていることが形となったものである。また、他の先生へとつないでいくことは、人間関係力を高めていくことも意図している。この手立ては、授業づくりに必要な3つの力が向上が図られることをねらったものである。

【図12】ブレインライティングにより出された意見

氏名	考えていること、手立て		
授業者	算数的活動・つくる ・分類する	ワークシート・ペアでの 話し合い	前時までに学習したことを 掲示したり、まとめたりして平行を 見つける手助けとする
A先生	形によって色を変えた色画用紙を 実際に貼り合わせて切る。できた形を 使って仲間分け	ワークシートの方が良い...? P30上半分のプリント(図案)にして、まとめとして 貼らせるのはどうだろうか。	・掲示(平行の意味)の活用 フル ・ペアでの話し合い
B先生	もともとの形をたてておくような 工夫。	1人で見るとりこまうつかいわ けるのはどうだろうか。	・適宜、掲示する。 ・学習班
C先生	ジオボッドの 使用の便利さ(利点)を おぼえらる。平行や直線の長さや 位置関係がわかりやすい。これは 子どもにも伝わりやすい。これは 子どもにも伝わりやすい。		

④ メンタリングチェックカードについての共通理解

指導案検討において、自分の発言がメンタリングの6つの役割(機能)の中のどの役割(機能)を果たしているかについての共通理解ができていなかったという検証Iでの反省を基に、検証Iで実際に出された意見・感想を使って、発言がどの役割(機能)を果たすのかをメンタリング通信で説明した。

その際、メンタリングの6つの役割(機能)が、1つの発言の中に複数含まれることがあることについても説明した。

(4) 第1回指導案検討会の様子から

主な発言や感想

- ☑ 授業者の考えている手立ては、児童がイメージをもつのに効果的であると思う。
- ☑ 実物投影機と大画面テレビを使って説明させると、分かりやすいものになると思う。
- ◇ 学年部全体で協議できること、研究授業を行うことは、大変意義があると思う。
- ◇ 視覚教材を効果的に活用するという手立ては、前回の3年生の研究授業でも実践されたことであり、職員が学び合ったことが生かされているということだと思う。

考察

上述の意見や感想以外に「いつも努力しているね」等、授業者の長所を認める発言や、「その時間のまとめを、画用紙等には書けばそのまま掲示できる」といった意見もあり、SWOT分析で授業者が自ら挙げていた「効率が悪い」という短所に対する意見が出された。

また、ブレインライティングで出された意見が、指導案に取り入れられていた。また、ブレインライティングで出された中には、「正しい姿勢で授業を受けさせることの大切さ」にふれたものもあり、授業者に対する支援内容に広がりが見られた。

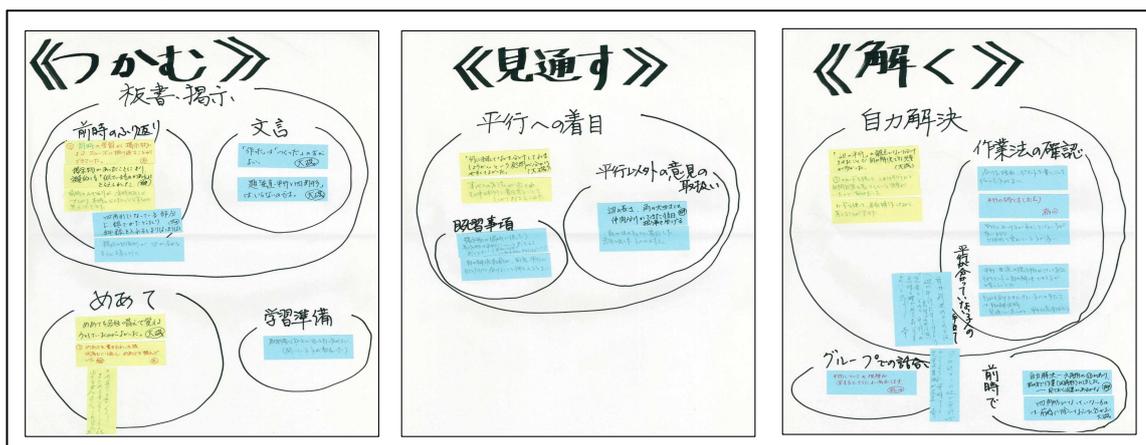
手立ての効果もあり、各自が積極的に意見を述べ合っていたが、意見が焦点化されていないところもあったので新たな手立てが必要である。

(7) 第2回指導案検討会の様子から

事前授業を受けての指導案検討であった。前回の反省を踏まえ、話し合いでの意見を集約しやすくするために、参観者全員に授業中に成果と課題を色分けした付箋に記入してもらい、授業終了後に回収した。回収した意見は、「つかむ」「見通す」「解く」「確かめる」「振り返る」段階ごとに集約し、成果と課題を視覚的に捉えやすくした【図13】。

この手立ては、意見を集約し、協議をより深めるものであると同時に、意見を書くことで6つの役割（機能）を果たされたり、他の先生と自分の意見が共通したりしたものであれば自己肯定感が高まるなど、授業づくりに必要な3つの力の向上を高めることもねらった手立てである。

【図13】 学習指導過程の段階ごとに授業の成果と課題をまとめたもの



主な発言や感想

- ☐ 掲示物を活用して、平行を意識させる必要があったのではないだろうか。
- ☐ 平行関係を見つける・確かめる方法をしっかりおさえないといけないのではないか。
- ☑ 自力解決をさせる場面で、自分の意見をもたせる工夫が必要である。
- ◇ 研究授業前に、研究授業で行う箇所を同じ学年の他の先生が行うというこの学校の研究の流れはすばらしいものである。それは、まさしくOJTであり、授業力を向上させるのに有効な手立てである。

考察

感想の中に、「事前授業における成果と課題が分かりやすかった。そのことにより、協議の柱が明確となり、協議が深められた。」というものもあり、改善点（協議の柱）が明確になっていることから、協議の視点がぶれることなく検討することができたことが分かった。また、みんなで意見を出し合ったということが形として残っているので、人間関係が構築されていることを意識させることにつながったと考える。

協議ができなかった点についても、すべての意見を集約したものが形として残っていることで、誰もがいつでも見ることができ、研究授業者だけでなく、多くの人にとって授業改善の見通しを立てることに役立つ資料になると考えられる。

(8) 事後研究会の様子から

主な発言や感想

- ☐ 実物投影機の活用は、児童の理解を深める上で効果的なものである。
- ☐ グループ活動によって、理解を深められるとは思いますが、話し合いの進め方（発表の順番等）については、工夫が必要である。
- ☐ 児童に自分の考えを伝える力を身に付けさせるには、それぞれの教科の特性を考慮しながら、他教科でも練習を積み重ねていかなければならない。
- ◇ 授業者の緻密さが発揮された授業であり、これまで協議してきたことが活かされたと思う。

考察

教育機器が活用されていたり、掲示物が工夫されていたりするなど、これまでの2回の指導案検討で出された意見を基にして、授業者独自の工夫が加えられた授業が行われた。その結果、事後研究会では、それらの手立ての有効性について数多くの意見が出された。意見の中では、「ぜひ自分も実践したい」「実物投影機の使い方を学びたい」というものもあり、お互いの知識・経験・技術が継承されていることが感じられた。また、それは授業者の持ち味が認められた発言であるともいえる。

事後研究会の中では、他の学校で実施された授業研究会に参加した際の資料の紹介もあり、自分が知っていることを広めていこうという意識の向上が感じられた。

(カ) 11月のメンタリングチェックカードの自己評価から

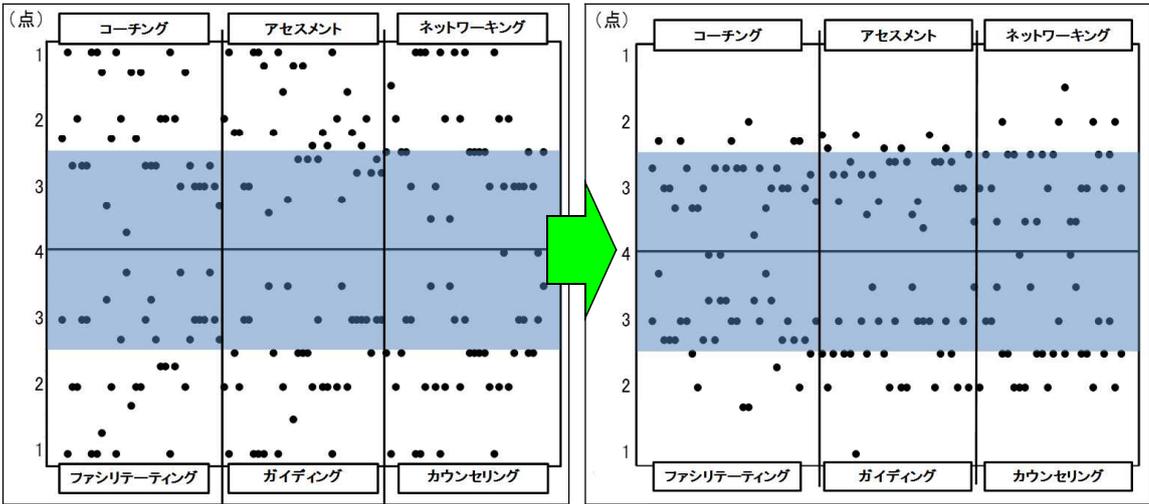
各個人の10月末と11月の自己評価の結果を基に、メンタリングチェックカードの役割（機能）別に、自己評価した点数の平均値を比較した。その結果を示したのが【表4】である。

【表4】メンタリングチェックカードの自己評価の比較（単位：点）

	コーチング	アセスメント	ネットワーキング	ファシリテーション	ガイディング	カウンセリング
10月末	2.21	2.14	2.30	2.40	2.30	2.39
11月末	2.88	2.73	2.80	2.80	2.58	2.63

また、メンタリングチェックカードの自己評価の結果を基に、全体の分布図を作成した。10月（左側）と11月（右側）の結果を比較したものは下図の通りである。

網掛け部分は、2.5点以上を表している範囲である。10月の自己評価では6つの役割（機能）の平均値で最も高かったのが2.4点であったので、網掛け部分に入る点が多いことは、6つの役割（機能）自己評価の数値が高まったものとなる。なお、10月の分布図については、検証Iの後にメンタリング通信に掲載して知らせている。



考察

自己評価の点数が全体的に高まったこと、つまり、6つの役割（機能）が果たされていることが、【表4】や分布の様子から分かる。

平均値だけでも変容は分かるが、分布図で個人の様子を可視化することで、全体的な成果や課題が捉えやすくなり、メンタリングを継続して行うための一助となるものとなると考える。

(カ) 算数科に関する意識調査（児童対象）の結果から

7月と12月に、全児童を対象として算数科に関する意識調査を実施した。

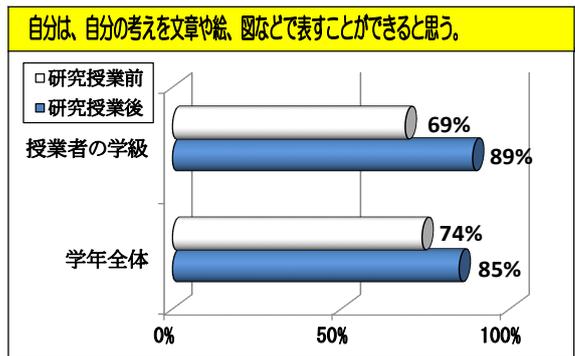
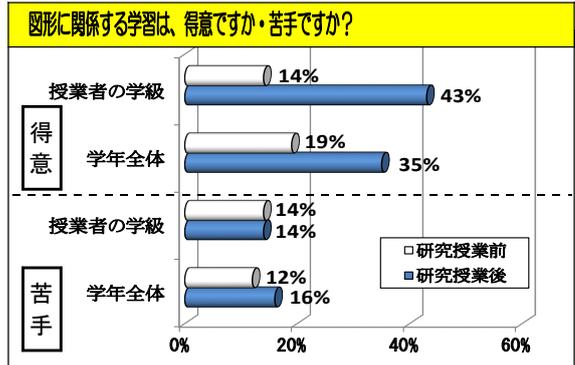
右図は、メンティ（11月の研究授業者）のうち、これまで検証の様子を記載してきた中学年（4年）の調査結果である。

考察

研究授業で取り扱った図形領域の学習に対して、「得意」だと感じている児童が増えている。また、「自分の考えを表すことができる」と感じている児童の割合も増加している。さらに、授業者から「今後も多くの先生方と関わって授業づくりを進めたい」という感想が寄せられた。

これらのことから、「子どもに自信をもたせることができた」という充実感や、教員同士が積極的に関わり合っていたよかったという充実感を味わえたといえる。それは、本校の主題研究の目標である「筋道を立てて考え、表現できる児童の育成」の達成に近付いているということでもある。

学年全体としては、図形領域に対して苦手意識をもつ児童が増えている。このことは課題ではあるものの、メンタリングの効果を実感したことで、課題解決に向けてさらなる協力体制が構築されていくことが期待できると考える。



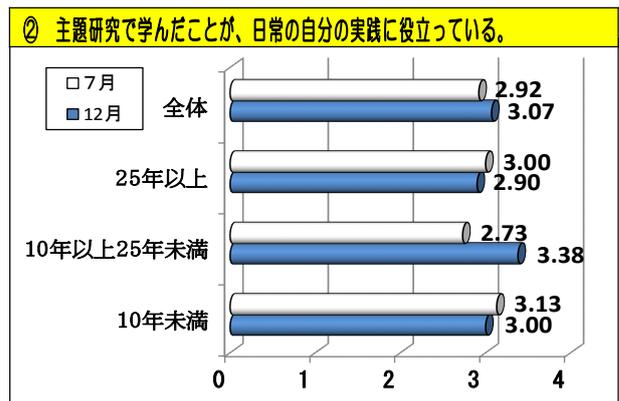
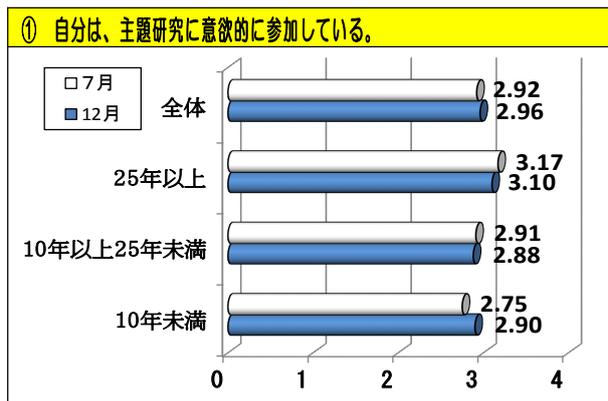
(キ) 検証Ⅱでの成果と課題

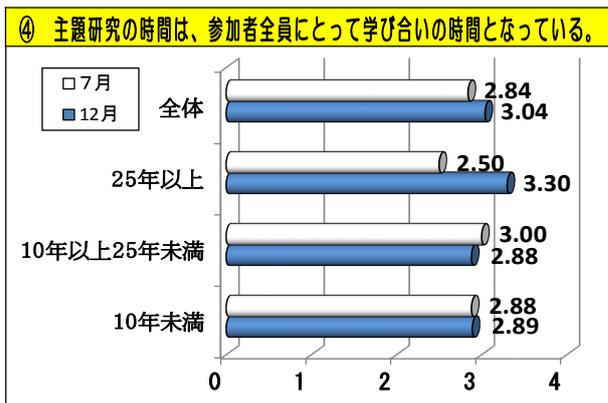
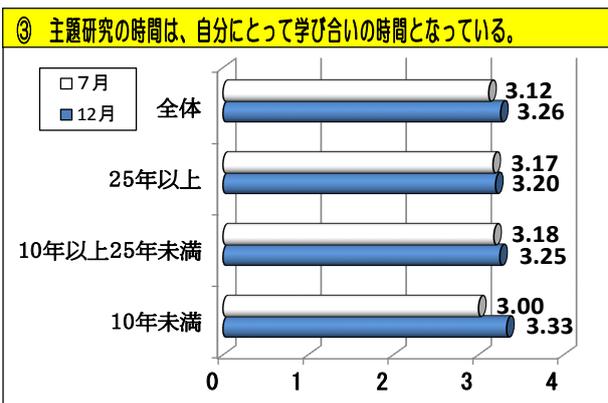
- 「ブレインライティング」と「SWOT分析」により、お互いに関わり合い、授業者に寄り添った支援がなされ、授業者の持ち味を生かした授業ができた。
- 主題研究の時間の「感想を書く」時間を、感想を「言う」時間にすることで、直接、賞賛や励ましの言葉を聴く機会が増え、研修意欲の向上につながった。
- 指導案検討において、それぞれの考えを可視化することは、協議を焦点化する上では効果的だったが、資質向上を図るまでには至っていない。
- 人材活用表をほとんど活用できなかった。学年部で協議をしているので、同じ学年部の教員同士では人材の活用が図られているといえるが、他の学年部との関わり合いを深めるためにも人材活用表を生かすための手立てを講じなければならない。

Ⅷ 主題研究に対する意識調査と授業づくりに必要な3つの力についての自己評価

1 主題研究に対する意識調査

7月に実施した主題研究に対する意識調査（1－7ページ）を12月に再度実施した。比較した結果は以下の通りである。



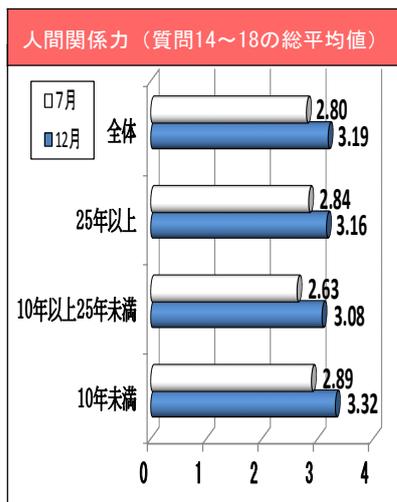
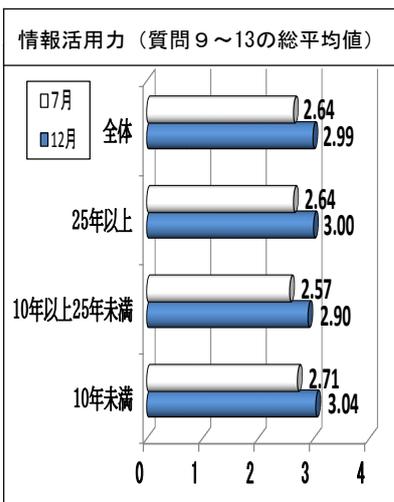
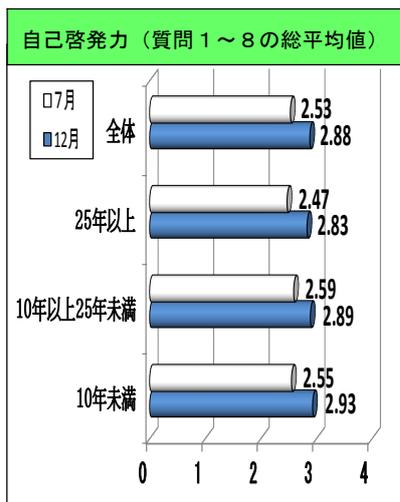


考察

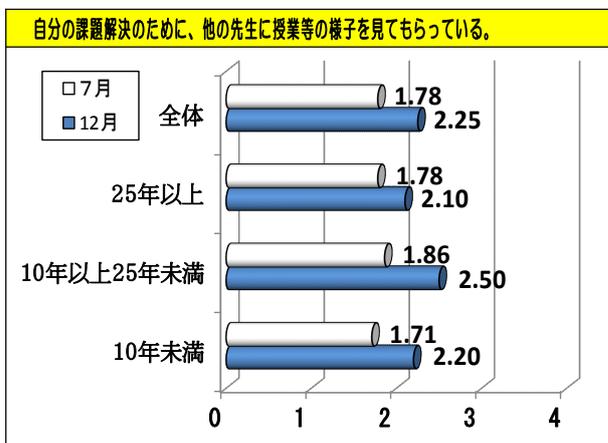
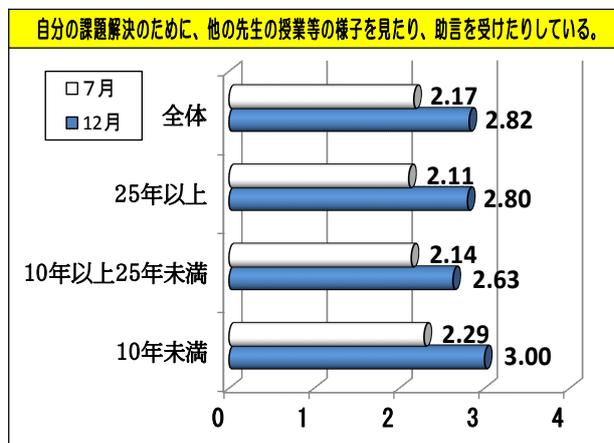
「参加者全員にとって学び合いの時間になっている」と感じた教職経験25年以上の職員が増えていることが顕著に表れている。また、教職経験10年未満の職員の「自分にとって学び合いの時間になっている」という意識も高くなっている。これらのことは、経験年数に関係なく双方向に学び合うという本研究が目指すメンタリングの考え方の共通理解が図られた結果であるといえる。

2 授業づくりに必要な3つの力についての自己評価

7月に実施した授業づくりに必要な3つの力についての自己評価（1－8ページ）を12月に再度実施した。比較した結果は以下の通りである。（数値は上段が7月、下段が12月の結果）



また、下グラフは、7月に実施した際に特に数値の低かった「授業を等の様子を見る、見せる」に関する項目（1－8ページ参照）の変容である。



※ 左側が評価項目7（11・14）の変容、右側が評価項目8の変容

考察

どの項目も数値が高まり、メンタリングが授業づくりに必要な3つの力（自己啓発力・情報活用力・人間関係力）を高めるのに効果的であったことを表している。特に、人間関係力に関する数値が高い。これは、メンタリングチェックカードで役割（機能）を意識させただけでなく、主題研究でのお互いの考えや思いを交流できたことが大きな効果をもたらしたのではないかと考えられる。また、今後もお互いに学び合っていこうとする土台が築かれていることを示しているものとする。

さらに、課題として挙げていた「授業等の様子を見る、見せる」ことに関する項目において、教職経験に関係なく、すべての数値が高まったことは、「メンターもメンティも共に成長する」という本研究におけるメンタリングの考え方が具現化されたものであるといえる。

そして、メンタリングの手法を取り入れることが、教師の根幹ともいえる「授業力」を向上させるための1つの方法として有効であるといえる。

IX 研究の成果と課題

1 研究の成果

- メンタリングチェックカードやメンタリング通信により、お互いに自分の知識・経験・技術を振り返り、生かしていこうという意識を高めることができた。また、そのことにより人間関係を深めることができた。
- お互いに関わり合う中で、今後も学び続けなければならないという意識を高めることができた。
- 職員間の学び合いは、これまでも行われてきたことであるが、本研究で実践したように、「意図的に」教職員の学び合いを促進していくことが、資質向上、そして子どもの成長にとって効果的であるということが明確になった。

2 研究の課題

- メンタリングチェックカードでの評価では、メンターとメンティとの評価に差がある場合もあった。それぞれの自己評価ではあるが、成長したか（資質が向上したか）どうか、充実したかどうかを評価するには、十分に話し合う必要がある。対話の時間の不足は、自己開示があまり図られていないことにもつながっている。
- 主題研究の時間だけの関わり合いに終わり、人材活用表を生かすことなど、日常の学び合いの促進については、個人差が大きいままであった。メンタリングを取り入れることの有効性は感じられているので、主題研究以外での日常の学び合いを促進する手立てが必要である。

参考文献

- 「教職員の資質向上実行プラン～学び続けよう!!子どもたちの豊かな未来を切り拓くために～」
(平成25年3月 宮崎県教育委員会)
- 「自ら授業力を高める校内研修マニュアル」 (平成23年3月 名古屋市教育センター)
- 「ミドルリーダーのためのメンタリング・ハンドブック」
(平成24年3月 監修 高知大学 島田 希)
- 「メンタリング・マネジメント」 (福島 正伸 著 平成17年 ダイヤモンド社)
- 「メンタリング入門」 (渡辺三枝子・平田史昭 著 平成17年 日本経済新聞社)
- 「We (みんな) でつくる学校」 (平成22年 監修 水落 芳明 新発田市立五十公野小学校)
- 「We (みんな) でつくる学校Ⅱ」 (平成22年 監修 水落 芳明 新発田市立五十公野小学校)

《研究実践校》都城市立西小学校